

一致関係を表す形容詞

——「太郎は次郎と血液型が同じだ」——

八 亀 裕 美

1. はじめに

日本語の形容詞を一般言語学での研究成果を視野に入れながら帰納的に記述してきた。記述に際しては、奥田靖雄を代表とする言語学研究会の言語理論の枠組みに従って記述を行っている。

初期の段階では、形容詞のなかでも典型的な〈特性〉〈状態〉を表す形容詞を中心に記述を行い（八亀 2008 など）、その後、いわゆる「比較表現」を媒介として（八亀 2014）〈特性〉から〈関係〉を表す形容詞の具体的記述（「近い」と「遠い」）（八亀 2015）へと記述の範囲を広げてきた。本稿では、語彙的な意味として〈関係〉を表す形容詞の具体的記述の第二弾として、一致関係を表す形容詞の「おなじ（だ）」について考察する。

形容詞の研究は、語彙＝文法的な記述の進め方が必要になる。動詞研究のように、言える言えないでテストフレームを用意するような記述方法は、形容詞の本質となじまない。本稿でも遠回りなようではあるが、実際の用例から帰納的に記述を進めていく。

今回の記述の対象となる「おなじ（だ）」という形容詞は語彙的な意味として「一致」という〈関係〉の中でも特別な意味関係を表す形容詞である。哲学的には「同一性」（あるいは類似性）というのはいへん奥深くかつ長い議論の歴史を持つ問題であり、本稿で扱う「おなじ（だ）」という形容詞の記述で明らかになる〈特性〉〈関係〉〈質〉の関係性は、このような哲学的な課題にも通じるものである。

形容詞研究という立場から「おなじ（だ）」という形容詞の用例を観察するとき興味深いのは、この形容詞の用例を見つめることが、形容詞という品詞にとってもっとも特徴的なタイプである〈特性〉のありかたそのものを考えることになる、という点にある。

本稿の記述のポイントは次の2点である。

1) 「おなじ（だ）」の意味・用法の中心は、「〈質〉的な一致関係」ではなく「〈特性〉の共通性に基づく特

徴づけ」である。

2) 上記と関連して、中心となる文型は「AはBとXがおなじ（だ）」である。

以下、記述の前提として、奥田理論における〈特性〉の定義（第2節）、「おなじ（だ）」という形容詞の文法のかたちづくりについての基礎的なこと（第3節）、語彙的研究における記述（第4節）、基本的な文型（第5節）を確認したうえで、具体的な記述に進んで行く。

2. 時間的限定性と〈特性〉について

形容詞の意味の中で、もっとも基本的である〈特性〉がどのようなものであるか、という点について、本稿との関係を軸に確認をしておきたい。

まず、本研究は奥田（1988）や工藤（2002）に従って、時間的限定性というカテゴリーを認めている。時間的限定性とは、具体的・一時的・偶発的な〈現象〉か、ポテンシャルで恒常的な〈本質〉かの違いを捉えるものであり、現代日本語の標準語には形態論的に表す手段はなく、意味論的なカテゴリーである。奥田（1988）は、文の意味的なタイプとして〈運動〉〈状態〉〈存在〉〈特性〉〈関係〉〈質〉を認めるが¹⁾、このうち〈運動〉と〈状態〉が時間的限定がある〈現象〉であり、〈特性〉と〈質〉が時間的限定性のない〈本質〉である。〈存在〉は〈現象〉になる場合も〈本質〉になる場合もある（具体的な用例などについては紙幅の都合上割愛するが、八亀（2008）に詳細な議論があり八亀（2015）にも簡潔なまとめがあるので参照いただければ幸いである）。

形容詞の語彙的な意味としてもっとも関連が深いのはこのうち〈特性〉である。定義を、奥田が『ことばの科学7』（言語学研究会編 1996）で樋口文彦の論文についての解説（「発行にあたって」）を行っている文章を引用することで確認をしておく。

他方では、《特性》は物に恒常的にそなわっている、物

そのものの、もちまへの性質である。この性質は他との相互作用のなかで自己暴露するのであって、ふつうはそうすることもなく、ポテンシャルなものとして人や物の内部にかくれている。たとえば、「あの人は意地がわるい」といったところで、その表現にはいかなる具体性もなく、抽象的に人の性格を特徴づけているにすぎない。しかし、この表現は「あの人」の過去における、たくさんのふるまいを経験的に一般化しているし、ときとばあいによっては、これからも、おなじようなふるまいをおこなうだろうという見とおしをもふくみこんでいる。特性が、人や物にそなわっている、ポテンシャルなもちまへの性質であるということは、こういうことなのである。(発行にあたって 奥田靖雄：6-7)

この記述からも明らかなように、〈特性〉は、思考による一般化が必要である。ここでポイントとなるのは、このような一般化においては、「おなじような」「くりかえされる」〈現象〉から〈本質〉を導き出しているという点である。「おなじ(だ)」という形容詞の用例を見ていくと、この一般化のありかたを観察することになる。哲学的な議論を待つまでもなく、ある個人の態度を、以前と「おなじ」であると評価したり、複数のものに「おなじ」側面を見いだしたと評価する話し手の態度は、個別・具体的な〈現象〉から恒常的な〈本質〉を見いだそうとする過程である。

3. 「おなじ(だ)」の文法的な形作りについて

記述に先立って、本論で扱う「おなじ(だ)」の文法的な形作りについて、基本的なこととして確認をし

ておく。「おなじ(だ)」は、基本的に第二形容詞であるが、第一形容詞と同じ形で用いられることもある。

鈴木(1972)のp429に、第一形容詞と第二形容詞の文法的な形が並べて示されている。それが図1の内側の□で囲んで示した部分である。その右に、「おなじ(だ)」の形づくりについて比較できるように書き込むと以下のようなになる。

このように、基本的に第二形容詞と同じかたちづくりをするが、以下のような特徴がある。

- 規定語になるとき＝「おなじ」しか用いられない
- なかどめになるとき＝「おなじく」という第一形容詞型のかたちが見られる

「おなじに」という古い第二形容詞型のかたちも見られる

以上を文法のかたちづくりについての基本的なこととして確認しておく²⁾。

4. 先行研究

主に語彙的な研究になるが、いくつか「おなじ(だ)」(あるいは「ひとしい)」に関する帰納的な記述がある。本稿は語彙＝文法的な記述を目指す。基本的な意味の整理として確認しておく。

4.1. 西尾(1972)

『形容詞の意味用法の記述的研究』

形容詞研究の基本文献である西尾(1972)では、「おなじ(だ)」は「第1部 形容詞の意味の諸側面」で「2.1 広汎なものごとの属性」の「2.1.2 異動・

(第一形容詞)	(第二形容詞)	
うつくしい	きれいな	「おなじ(だ)」 おなじ おなじ／おなじだ おなじだった おなじく／おなじで／(おなじに) おなじだったり おなじなら おなじだったなら おなじだったら おなじだと (おなじなら) おなじでも おなじだって
うつくしい	きれいだ	
うつくしかった	きれいだった	
うつくしく	きれいで	
うつくしくて		
うつくしかったり	きれいだったり	
うつくしいなら	きれいなら	
うつくしかったなら	きれいだったなら	
うつくしかったら	きれいだったら	
うつくしいと	きれいだと	
うつくしければ	(きれいなら)	
うつくしくても	きれいで	
うつくしくたって	きれいだって	

図1 「おなじ(だ)」のかたちづくり

関係など」の項目で以下のように類義の形容詞とまとめられている。

- (a) ひとしい, おなじ, そっくりな
 (b) 反対な・の, ぎゃくな・の, あべこべな・の, さかさまな・の (西尾1972:45)

個別の記述においては、最初に「僕は驚いた。同じモデルを使って描いたという二つの画があまりにも別だからだ」のような場合は、他の何かと比べるのではなく、それ自身と同一なのであって、対象語はとらないことを確認し、その後、2つ以上あるものが、あらゆる点で、またはなにかの点で差がないことをあらわすばあいは、原則的には対照的關係を表す語であるとして「AとBがおなじだ」「AがBとおなじだ」のそれぞれについて用例を挙げている。

4.2. 森田(1977)『基礎日本語1』

本稿では「おなじ(だ)」について観察するが、森田(1977)では「ひとしい」の項目で詳しい議論が行われているので、その部分を参照する。定義は次のようになっている。「本来異なる二つ以上の事物を、その行為や性質・数量・程度などの面において比較し、両者が(またはそれらが)同じ価値を有していると判断する表現。」この後半の定義は重要であると思われる。このことは、その後の分析でも明確に示されている。この部分、直接引用しておく。

□「AトBハ等しい」、□「AハBニ(ト)等しい」の二種の文型がある。「角Aは角Bに等しい」の場合、「角Aと角Bは等しい」の文型も成り立ち、A・Bの位置を入れ換えても大差ない。しかし、このような入れ換えが可能なのは□文型の場合で、□文型では、たとえ入れ換えができて表現意図が異なってしまう。

「AハBニ等しい」は、Aが価値的にBの表す価値と大差がないということで、AとBを引き当ててみる比較で「A→B」の方向をとる。「角Aは角Bに等しい」なら、角度という全く同類同士の比較であるから「A←B」も論理的に成り立つ。しかし、A・Bが同類ばかりとはかぎらない。「等しい」と認定する発想は、むしろ主題として取り上げたものを全く異種のもの引き合わせ、価値的に結びつけるところにある。 森田(1977:398)

八亀(2008)や八亀(2014)などで論じてきたように、「おなじ(だ)、ちかい、とおい、したしい」などの語彙的に「関係」を表す形容詞が述語となっても、典型的な<関係>を表す形容詞述語文は「AとB

は[形容詞]」の文型であり、「AはBと(に)[形容詞]」の場合は、Bとの関連性によってAを特徴付ける<特性>を表す形容詞述語文と考えることができる。

また、森田(1977)が、「主題として取り上げたものと全く異種のもの引き合わせ、価値的に結びつける」という指摘をしているが、形容詞述語文の評価的な性質についての大切な指摘である(この形容詞述語文の評価的な性質については、八亀2008などを参照)。

4.3. 小西編(1989)『英語基本形容詞・副詞辞典』

ここで参考までに、小西編(1989)のsameの記述を見ておこう。

「1.概説」の部分直接引用しておく以下のようになる。

この語は、基本的に「人や物事が既述の、あるいは後述の人や物事と比較対照され、両者の間に相異点を見い出せない」という意味を表す。その指し示す内容には幅があり、1つの対象を考慮し、それについて述べる場合には「同一の、ほかならぬ」という意になる。一方、比較する対象が2つ以上ある場合には、それらの間に多少の相異は認められるが、種類・外観・質量・程度などの点では区別できないほどの類似性があることを表し、「同様の、同じような」という意が表される。また、人の性質や物事の状態などが時を経ても相異のないことも表し「変らない、同じ」という意でも用いられる。(小西編1989:1593)

そのうえで、意味・用法を次の6つに分類している。

- 1a. *the same* A 同一の [ほかならぬその] A <人 [物, 事]>
 1b. *the same* A (種類・数量・程度・質などが) 同じ [一致する, 異なる] A <[物, 事]; 単調な A <事>
 1c. *the same* A (性質・状態などが) 同じ [変らない] A ; (外観・名前などが変わっても実質的に) 同様の A <人 [事]>
 2a. S be *the same* (as ...) S <事 [物]> が (...と) 同一である
 2b. S be *the same* (as O) S <物 [事, 人]> が (O <物 [事・人]> と) (種類・概観などが) 同じである [異なる]
 2c. S be *the same* (as ...) S <人 [事]> が (...と) 変っていない [実質的に同じである]

5. 基本的な文型について

基本的な文型は、述語になる場合は、先行研究が共通して挙げているように、「AとBはおなじ(だ)」と「AはBとおなじ(だ)」の二つである。しかし、実際の用例を見てみると、二つのものが完全に一致すると

いう関係ではなく、何らかの観点や部分に一致点あるいは共通点を見いだした、という用例がほとんどである³⁾。つまり、

・太郎と次郎は同じだ。／太郎は次郎と同じだ。

ではなく

・太郎と次郎は血液型が同じだ。／太郎は次郎と血液型が同じだ。

・血液型という点では、太郎と次郎は同じだ。／血液型という点では、太郎は次郎と同じだ。

のような形で現れることが多い。

さらに、このように、すべての要素が一文の中にきれいにそろっている例は希であり、多くは「何と何を照らし合わせて、一致を見いだしたのか」について、前後の文脈から復元をする必要が生じてくる。そのとき、次の(1)か(2)のどちらなのかを悩むことがある。

・太郎と次郎は血液型が同じだ。／太郎は次郎と血液型が同じだ。 …… (1)

・太郎の血液型と次郎の血液型は同じだ。
／太郎の血液型は次郎の血液型と同じだ。 …… (2)

抽象化すると

・AとBはXが同じだ。／AはBとXが同じだ。 …… (1)

・AのXとBのXは同じだ。／AのXはBのXと同じだ。 …… (2)

のどちらかが判別が難しい場合もある。

先行研究の基本的な文型で挙げられていない「X」という3つ目の要素は、「おなじ(だ)」という形容詞にとってはかなり重要である。これは、「おなじ(だ)」が規定語になる場合に、かざられる名詞となるのが、Xである例が多く見られることからわかる。単純化して、Xが述語として機能する例を挙げる。

・太郎と次郎は同じ血液型だ。／太郎は次郎と同じ血液型だ。

・AとBは同じXだ。／AはBと同じXだ。

後で具体的に用例を見ていくが、「一致関係であると評価する」といっても、完全に〈質〉的に一致している、というのではなく、複数のものに何らかの共通した〈特性〉を見いだしているという表現がこの「おなじ(だ)」という形容詞の意味・用法の中心的部分である。このXは、八亀(2012)で観察した「評価を絞り込む表現形式」の一つとして扱うことも不可能ではないが、必須な成分とまではいかないまでも、基本的な要素であると見なしてよい。

6. 規定語になる場合

まずは、「おなじ(だ)」が規定語として機能する場合について、記述していく。語彙的な先行研究で指摘されている二分類にそって用例を観察する。

6.1. 「同一であること」を示す場合

先行研究で確認したように、「おなじ(だ)」の意味を分類する場合、次の2つを区別するのが一般的である⁴⁾。

1) 一つのものが(時間の経緯や状況の違いにもかかわらず)不変である。変わらない。同一である。

2) 二つ以上の物事が共通性を持っている。二つ以上のものの動作、状態、程度などに違いがない。共通の様相、状態を呈する。同様である。

まずはこの1)の場合について見ていこう。先行研究のところで簡略化して示した西尾(1972)の記述を引用しておく。

「おなじ」が「同一であること」を意味するばあい、たとえば、

○僕は驚いた。同じモデルを使って描いたという二つの画があまりにも別だからだ。(芸術新潮1956年8月209)

○十一年間同じ監督でやっているなんというのは、アメリカにだって滅多にありゃしない。(野球界1956年1月55)

のようなばあいには、他の何かと比べるのではなく、それ自身と同一なのであって、対象語はとらない。

西尾(1972:48)

この場合、「一人の」「一台の」などと言い換えられるのが特徴である。

・いずれ発見されるだろうが、それは構わない。死体

の身元を警察は絶対に突き止められない。彼等の記録では富樫は死んでいる。同じ人間が二度死ぬことはない。(容疑者：389)

- ・「尾行？」／「最初は気づかなかつたんだけど、走っているうちにわかったんだ。同じ車がずっと、僕の後ろを走っていた。(後略)」(容疑者：225)

このような「おなじ(だ)」は、かざられる名詞を唯一のものとして指定する。「ほかならぬその」の意味で用いられている。この用法は、基本的に規定語の場合にしか見られない⁵⁾。

次に挙げる例のように、「常に」「毎日」と時間的限定性の観点から言っても一般化が進んでいることが副詞的成分で明示されている場合も、上に準じると考えてよいだろう⁶⁾。

- ・「なんだい、見当ってのは？」／「板木に置く紙の位置を定める工夫だ。角を決める鉤の形のもの、底辺を定める一直線の突起が板木には必ず彫り込まれている。そこに紙を合わせて摺ると、常に同じ位置に印刷されるって仕組みだよ。(後略)」(謎：246)
- ・「おまえが俺と例の事件とを結びつける根拠はそれなのか」／「そのとおり、ともいえるし、少し違ってもいえる。君が毎日同じ店で弁当を買ったって何とも思わないが、特定の女性に毎日会いに行っているとなれば、見過ごせない」(容疑者：296)

「時間の経過や状況の違いにもかかわらず不変である」とあると言っても、その頻度が2回や数えられる程度の場合は、まだ個別・具体性があり、「さっき確認したもの(こと)」と照らし合わせて「おなじ」と評価していることになり、対象語を取らないのか、省略されているのか判断に悩むこともある。こうなってくると、性質が少し異なってくる。「一人の」「一つの」への言い換えも難しい。6.2で扱う方が適切かもしれない。

- ・「ちょっと、ちょっと」／と夕子が私の腕をつつく。／「何だよ？」／「違う人よ。ほら…」／「違う、って、何が？——え？」／私は目の前に断っている男をまじまじと見つめた。確かにさっきと同じ男に見える。が、服装が違う。(謎：116) [さっき見た男と]
- ・声をかけてきたのは、まさかこの男ではあるまい——石神がそう思った直後、長髪の男は頬杖をしたままいった。「紙と鉛筆には限界があるぜ。まあトライ

することには意味があるかもしれんが」／同じ声だったので、石神は少し驚いた。／「俺が何をしているのか知ってるのか」(容疑者：107) [さっき聞いた声と]

また、「その」や「この」に言い換えが可能な次のような例も強い同定とは言えないが、この延長線上にあると考えてよい。

- ・同じ日の日記では、ピールに「女官たちは政府の対抗勢力の奥様たちです」と指摘されて、女王が「そんなことは関係ありません。私は彼女たちと政治の話などしません」と答えたということが書かれている。(魅惑：41)
- ・翌る日、家から京成電車の堀切菖蒲園駅まで、無理のない足取りで歩いて、何分かかるかを計ってみた。十六分であった。通勤していたころは、同じ距離を十三分と見込んでいたのである。(薄情：126)

別個のものだと思っていたものが実は同じだったと気づく場合もある。この場合は複数のものを比べているという点では次で見る6.2に分類すべき用例だが、同定そのものが重要で「ほかならぬその」への言い換えも可能であり、境界的な例である。

- ・「家だってそうなのよ」／「というと？」／「私たちが最初に行った兼二郎の家も、車でつられて行った兼一郎の家も、同じ兼一郎の家だったのよ」(謎：164)
- ・(前略) まず兼二郎として私たちをもてなし、それから車で林の中をウロウロして、結局、同じ家に戻って来たわけ。(後略)」(謎：165)

6.2. 二つ以上のものが一致する場合

二つ以上のものが共通性を持っている場合について、別個のものであるが種類・外観・数量など相対的に具体的・客観的な点で同じであることが表される場合から記述を始め、より抽象的・内面的なものに重点が置かれる場合へと記述を進めていく。かざられる名詞は先の文型で確認した「X」に相当する要素であることが多く、複数のものにどのような共通点が見いだされたかが表現されている。

まず、複数の別個のものが、種類や外観、数量などの点で同じであることが表される場合について整理を進めていこう。次の例は「色」「二重らせん構造」「間

取り」という点において「隣同士」「細いフィラメントのアクチン繊維とDNA」「探している物件と今のアパート」に共通点が見いだされたことが表現されている。

- ・目の前の壁には無数の染みがついていた。中から適当な何点かを選び、頭の中でそれらの点をすべて直線で結んだ。できあがった図形は、三角形と四角形と六角形を組み合わせたものになった。次にそれを四つの色で塗り分けていく。隣同士が同じ色になってはいけない。もちろんすべて頭の中での作業だ。(容疑者：384)
- ・特に、細いフィラメントのアクチン繊維はDNAと同じ二重らせん構造なのに、DNAはきわめて安定しているのに対し(中略)、アクチン繊維は生物界で一、二を争うほど動的である。(形態：43)
- ・アパートの物件は確かに少なかった。半年前にもふたりでこうして捜したのだ。より好みはできそうにない。しかし家賃は安かった。今のアパートと同じ間取りで一万五千元かせいぜい二万五千元だった。(薄情：60)

大きさや高さなどが共通する場合も、少し抽象度は増すが、複数のものの外的な特徴として整理できる。

- ・また、ハードディスクの中身をすべて同じ大きさのパーティションにわざわざ置き換えてしまう奇妙な男もいた。はたから見ているとなにがいいんだかよくわからないが、本人は、「これが美しい」ということらしい。(機長：48)

文の構造があいまいになるタイプのものとして、複数のものが「同じ種類に属する」という表現がある。人の場合はかざられる名詞は所属先になる。カテゴリー化の表現である。

- ・機内という同じ職場で意思の疎通がうまく図れないなんてことが起きないように、会社ではエマージェンシー訓練とか合同訓練を年一回定期的にやっている。(機長：39)
- ・このような「典型的な外国人」を見ると、人はポッドスナップ氏のように、相手を自分と同じ感覚や良識を持った人間とは見なさなくなり、同じイギリス人には話さないことまでべらべらと話してしまうというのである。(魅惑：6)

- ・草薙は洗面を作り、着信表示を見た。湯川の言うとおりのようだ。かけてきているのは同じ班に所属の後輩刑事だった。(容疑者：37)
- ・セルロースは植物の抗重力素材である。背が高いほど重力に強く抵抗しなければならない。逆に、背が低ければ重力への抵抗も少しですみ、セルロースに対するデンプンの割合も増える。(中略)似たような話で、同じ植物でも水中に浮遊する植物プランクトンは、浮力と重力が拮抗するので抗重力素材が要らない。つまり、セルロースという骨格を大量に持つ必要がないのだ。(形態：21)
- ・同じ学問でも自然科学は、ギリシャ・ラテン古典や神学や哲学などの人文科学よりも下に見られていたことに対するウェルズの憤りと劣等感が感じられる。(魅惑：197)

慣用表現になっている次のような「同じ親として」という表現もこの延長線上にあると考えていだろうか。

- ・「(前略)前年残酷な形で一人息子を誘拐され殺され、翌年また子供ができた喜びでその被害者としての悲しみを忘れようとしたら、その子供が生まれて間もなく死んでしまった、その衝撃の大きさから今度は誘拐の加害者側にまわろうと考えてしまったその気持ちは…同じ親としてですね」/そういうと安原は一枚の写真を取りだした。(謎：291)

かざられる名詞が語彙的に場所の意味を表す二格名詞の場合⁷⁾は、存在や滞在を表す動詞とくみあわさって、ありかのむすびつきを作ることが多く、一緒に存在や滞在をしていることから、親密な関係性を示唆する。

- ・また、一八三五年の七月二十日の日記では、母方の伯母、メンスドルフ伯爵夫人が急死したことが記されている。ヴィクトリアは二年ほど前にこの伯母の訪問を受け、「同じ家に一週間以上も一緒に暮らして、同じ部屋にいて伯母さまがご用をなさっているのを見ていて、たいへん親切にさせていただいただけに、伯母さまを失うのはとくにつらい」と、その心情を綴っている。(魅惑：51)
- ・なんといっても国際線の場合、海外で何泊かを一緒に過ごすわけだから、パイロットはそこでスチュワーデスと仲良く食事をしたり、ステイ先で同じホテルに泊まって、…同じ部屋まで朝まで、なんていう話

を聞きながら聞いているのはよくわかる。だがほんとうは泊まるホテルも違えば行動もバラバラで、そんなケースはまずないといっている。(機長：31)

次に、かざられる名詞の語彙の意味が抽象的であり、話し手による一般化がさらに抽象度を増している例を観察していこう。このタイプは語彙的な制限がなければ、「同レベル」「同程度」など複合語で表されることも多い。

- ・一回目と同様に二回目も、全地球凍結が終わると、生物史上初の酸素を発生する光合成生物——シアノバクテリア——が大繁殖し、大気中の酸素濃度も現在とほぼ同じレベルになった。(形態：25)
- ・「石神が数学の試験問題を作るときのセオリーというのがあったら。思い込みによる盲点をつく、という話だ。幾何の問題に見せかけて、じつは関数の問題、というやつだ」／「あれがどうかしたのか」／「同じパターンなんだよ。アリバイトリックに見せかけて、じつは死体の身元を隠すという部分にトリックが仕掛けられていた」(容疑者：368)

かざられる名詞が「こと」の場合は前文脈の広い範囲を受けていることが多く、繰り返しを避ける文脈指示的な機能を果たしている。

- ・白髪混じりの下腹の出た年配の私服が調書を取った。交番で話したのと同じことを秀雄は話した。(薄情：85)
- ・「ニュースを見た時、まず君のことを思い出した。それで、急に不安になったんだ。何しろ殺人事件だからね。あの人がどんな理由で誰に殺されたのかは知らないけど、今度は君にとばかりがくるんじゃないかってね」／「小夜子さんも同じことをいった。誰でも考えることは同じなのね」(容疑者：135)
- ・体を拘束されることは何でもない。と彼は思った。紙とペンがあれば、数学の問題に取り組める。もし手足を縛られても、頭の中で同じことをすればいい。何も見えなくても、何も聞こえなくても、誰も彼の頭脳にまでは手をさせない。そこは彼にとって無限の楽園だ。(容疑者：384)

ここまで、規定語として機能する場合について整理をしてきた。同一であることを表す「ほかならぬその」の用法があり、また、二つ（以上の）ものに何らかの

共通する側面（＝X）を見いだしたことを表す用法があった。後者の場合は、Xが「おなじ」にかざられる名詞として現れることが多い。また、文の構造がとらえにくくなる場合としていくつかのタイプが認められた。

ここで、記述の流れからは外れるが、興味深い観察について触れておきたい。次の例は一見、「同じように」という連用的に機能する形が名詞を修飾しているように見える。

- ・化学的には、セルロースはデンプンと同じように炭水化物である。しかし、性質は全く異なる。(形態：19)

この文は次のように言い換えることが可能である。

- ・化学的には、セルロースはデンプンと同じ炭水化物である。

ここで注目したいのは、「同じような」に言い換えたのでは伝達内容に違いが出てしまうことである。「同じように」がかかっていく先は名詞述語の述べ立てる機能であり「炭水化物」という名詞のさしめす内容ではない⁹⁾。

7. 述語になる場合

次に「おなじ（だ）」が述語として機能するばあいについて、観察をしていく。

規定語のときに観察された同一であることを表す「ほかならぬその」の用法は基本的にないと考えてよい⁹⁾。基本的に複数の別個のものに共通性を見出したことを表す。

2つの文型があることは、先行研究のところで確認をした。「AとBはおなじ（だ）」という典型的な関係を表すタイプと、「AはBと（に）おなじ（だ）」というBとの関係性をAの特性としてさしだすタイプである¹⁰⁾。

八亀（2015）で「近い」「遠い」の記述をしたときも同様の傾向があったが、圧倒的に後者のタイプが多い。言い方を変えると、「おなじ（だ）」が述語になる形容詞述語文は、文のタイプとしては〈関係〉ではなく〈特性〉を表すことが多い、ということになる。

また、実際に用例を観察してみると、「複数のものに、完全な一致関係を認めた」という用例はほとんど

ない。「複数のものに何らかの共通した〈特性〉を認めた」という用例がほとんどである。そのため、「AはBとXがおなじ(だ)」のように、何らかの側面なり観点「Xが」によって、部分的な一致関係を表したり、八亀(2012)で概観した「評価を絞り込む表現形式」¹⁴⁾によって「～という点ではAはBとおなじ(だ)」のようにある特定の条件の下での一致関係を表すことが多い。気をつけなければならないのは、この「Xが」がとりたてられて「Xは」という形で文中に現れることが多く、「Aは」が前文脈にあり省略されている場合に、AとXの区別がつきにくくなることである。また、一つの文の中できれいな構造として現れるような例はまれで、前文あるいは先行する文脈でBについての記述があり、それを受けて「Aもおなじ(だ)」のように現れることが多い。

これらのことを念頭において、実際の用例を見ていく。

7.1. 「AとBはおなじ(だ)」

まず、先に述べたように用例は少ないが「AとBはおなじ(だ)」という典型的な〈関係〉を表す文タイプの例を挙げてみる。次の例は双子の話である。兄と弟について「学校が」(この場合は他の側面もおなじなので「学校も」ととりたてられている)という側面について一致していたことを表している。

- ・「ええ、家まで瓜二つなんですもの」/「私の父は、兄弟二人に公平であることを、いつも最大の原則にしていた。で、私たちがまだ子供の頃にもう、この二つの家を造らせたのだ。私と弟は学校も同じだった。しかし——生まれつきの性格、これだけは変わらん」(謎：135)

非典型例ではあるが、次の例も「左右は=左と右は」であり、同様に考えてよいだろう。

- ・電車の車両が連結すると進行方向が決まるように(電車は前後どちらにも走れるが)、体節が連結すると生物体の前後軸ができる。紙に一本の線を引いて前後軸とする。進行方向が前だ。この一本の線の右と左に世界が分かれる。分かれるが左右は同じ。同じではあるが重ね合わせることができない。要は右手と左手の関係で、鏡像関係という。(形態：22)

さらに非典型ではあるが、以下は「夫と夫人」は「人

の一生についての考え方が」という側面において類似さらに一致関係を見いだしていると見ていいだろう。

- ・「じゃあどうして結婚なさったんですか?」/興味があり、尋ねた。夫人はうふふ、と笑い、清水氏はふふ、と笑う。それから二人を代表する感じで清水氏のほうが、/「人の一生についての考え方が似ていたからでしょうね」/とこたえ、横から夫人が、/「おなじだったから、とあたしなら言うわね」/と訂正した。/「慣用的な言い回しに惑わされず、正確に言わなくちゃ」/それはつまり、夫婦揃って葬式好きだということだろうか。私は胸の内ではいぶかった。(アイロン：402)

前述のように、この文型は、2つ(以上)のものを照らし合わせて「おなじ」であると話し手が評価している〈関係〉を表すタイプの文であり、特徴として、7.2の文型のように比喩表現などになることはない。

7.2. 「AはBとおなじ(だ)」

次に「AはBとおなじ(だ)」のタイプについて見ていく。これは、Bとの関係性(この場合は同一性)をもってAを特徴付ける文であり、典型的な〈関係〉を表す文ではなく、〈特性〉の周辺的なタイプとして位置づけられる。

規定語のときと同様に、別個のものであるが、種類・外観・数量など相対的に具体的・客観的な点で同じであることが表される場合から記述を始め、より抽象的・内面的なものに重点が置かれる場合へと記述を進めていく。

まず、まったく別個のものを同じだと認識していることを揶揄するような場合がある。

- ・[シミュレーターの]画面はCGだが、あまりにそっくりなので、シミュレーター訓練を終えて、最初に実機に乗るパイロットが「あ、シミュレーターと同じだ!」とわけの分からないことに感動しているのを何度か見たことがある。(機長：70)

全体としては、先に確認したように、ある側面「Xが」やある一定の条件下「～という点では」で共通性を見出している例が多い。最初の例は「精度」という側面について、後の例は「その稲穂を見ると」という条件下で、「GCA」や「化石で出土した植物(下の用例では省略)」を「通常の計器着陸装置」や「私たち

がいま食べているお米」との共通性で特徴付けている。

- ・このGCA [地上誘導侵入] は、人間の経験と技がものをいう、現在の航空界に残されている数少ない場面といえる。管制官はレーダーの平面と垂直面の両方に映る小さな光の動きから、パイロットの癖や上空の風の状況を読み取り、進路と降下率を絶え間なく伝えて滑走路まで機を誘導する。しかもその精度は通常の計器着陸装置と同じという、まさに信じがたい職人技なのだ。(機長：64)
- ・その稲穂を見ると、私たちがいま食べているお米とほとんど同じでした。七千年以上前に、中国では稲作農業が発達していたことがわかります。(小学生：37)

規定語の時にも「別個だと思っていたものが同じだったと気づく」という例があったが、次の例は、目の前の娘の姿が、娘の話題に出ていたいじめられっ子の「セツちゃん」と同じであり、実はいじめられていたのが我が子だと気づく場面である。

- ・セツちゃんと同じだった。滑稽で、ぶざまで、悲しい姿が、何日か前に加奈子が話していたセツちゃんの姿と重なってしまう。(アイロン：260)

同じ時空間にある別個のものではなく、時間的に以前の状態と比較をして「不変である」と特徴づけるタイプとして次のようなものがある。始めの例は「以前の態度と」が省略されていると考えてよい。

- ・その後も工藤は、それまでと変わらず店に来てくれた。靖子に対する態度も同じだった。ただし、店外で会うことはなくなった。(容疑者：133)
- ・「ちょっと待ってください」工藤は書類鞆の中から分厚い通帳を出してきた。それをぱらぱらとめくり、吐息をついた。「何も書いてないから、たぶんいつもと同じでしょう。六時ごろに会社を出たと思います。疑うなら社員に訊いてみてください」/「会社を出た後は？」/「だから、何も書いてなから、たぶんいつもと同じです。ここへ帰ってきて、適当に何か食って寝たんでしょ。一人だから証人はいません」(容疑者：195)
- ・虎やライオンのような強い力をもつ獣に憧れるのは、いまも同じですね。プロ野球のチーム名が、ジャイアンツ、ドラゴンズ、タイガースなど、みんな強そ

うな名前になっています。(小学生：44)

前の文や文脈を受けて、「Aも同じだ」という文脈指示的な用法があり、説明的な文章などで好んで用いられている。

- ・いまの日本では、なによりも安い賃金で働ける人を求める傾向が出てきている。これは航空業界でも同じだ。(機長：26)
- ・それに不思議なのは、航空大学校に入ってしまうと卒業できない人はいないことだ。ほぼ全員が卒業する。途中でパイロットに向いているかどうかを判断して落第させるとかそういう発想がないらしい。その意味では、航空保安大学校(管制官の養成機関)も同じだ。(機長：43)

次の例は「共通性を発見した気づき」そのものに表現の重点があるが、上とつながるタイプである。

- ・彼女たちとどうかなろうという欲望は全くなかった。自分が手を出してはいけないものだと思ってきた。それと同時に彼は気づいた。数学も同じなのだ。崇高なるものには、関われるだけでも幸せなのだ。名声を得ようとすることは、尊厳を傷つけることになる。(容疑者：386)

最後に、「おなじ(だ)」の語彙的な意味が薄れ、文法的機能が前面化してくる用法を二つ観察しておく。

まず、ここで観察しているBとの関連性でAを特徴付ける文型では、抽象度が増すと、「ようだ/みたいだ」との言い換えが可能になり、比喩表現となる。「おなじ(だ)」はコピュラ的に働いている。

- ・[中華丼をレンゲではなくスプーンで食べる男のはなし] その甲斐あって、いまではがらがらと引き戸を開けて店に入ってきた瞬間に安田さんはお決まりの品をつくりはじめ、黙ってスプーンと箸を出す。これじゃあストローなしで牛乳が飲めない幼稚園児と同じだって、うちのやつは馬鹿にするんですよ、たしかにそのとおりなんです、人目を気にせず幼稚園児になれるのはここだけですからね、と相良さんは恥ずかしそうにしている。(アイロン：422)
- ・また、リョーさんは、/「養老院など、首にツナをつけられても行くものかい、監獄と同じだからなー」と言う。(薄情：21)

「それじゃあ何も対策をしていないのと同じじゃないか」のように相手を責めるような言い方もこの用法の延長上にある。

また、次の例は「だれが発表してもいい」と言い換えることもでき、評価のモダリティへの連続性が認められる。

- ・「勿体ないみたいですわね」／「それなら君がやればいい」／「私が！まさか」／「だれが発表してもおなじさ。君が仮説を提唱すれば、それに興奮して挑む浮世絵研究者が登場してくるかもしれない。それが研究にとってもっとも大事なことなんだ」（謎：238）

以上、「おなじ（だ）」が述語として機能する場合について、二つの文型ごとに用例を具体的なものから抽象的なものへ並べながら整理をしてきた。

中心的な文型は「AはBとXがおなじ（だ）」であり、さらに文法化が進んだ場合は、比喩表現を表すコンピュータに近いものや「してもおなじ（だ）」という形で評価のモダリティへと続く例が認められた。

8. おわりに

語彙の意味として〈関係〉を表す「おなじ（だ）」という形容詞について、語彙＝文法的な性質を、実際の使用例から帰納的に記述してきた。

用例の観察を通じて、話し手が、複数のものに何らかの共通した〈特性〉を見出し、そこに一致関係を評価的に認める過程を見ることができた。最初に述べたように、「同一性」（あるいは類似性）というのは哲学の世界では奥深くまた長い議論の歴史があり、また認知言語学における知識構造のあり方とも深く関わる難しい問題である。

ここではそのような議論に踏み込む準備はないが、本稿での観察を通じて明らかになったのは、「おなじ（だ）」の意味・用法の中心は従来考えられていたような「〈質〉的な一致関係」ではなく、「〈特性〉の共通性に基づく特徴づけ」であり、中心となる文型も「AとBは同じだ／AはBとおなじ（だ）」ではなく「AはBとXがおなじ（だ）」であるということである。また、最後に触れたように、比喩表現や評価のモダリティへの連続性も認められた。

今後の課題は多いが、その一つとして、「おなじ（だ）」が述語として機能している文と、名詞述語文との関係性がある。単なる修辞法の問題ではなく、断定

とは何かを考える糸口である。

- ・セツちゃんと同じだった。滑稽で、ぶざまで、悲しい姿が、何日か前に加奈子が話していたセツちゃんの姿と重なってしまう。（アイロン：260）
- ・セツちゃんだった。滑稽で、ぶざまで、悲しい姿が、何日か前に加奈子が話していたセツちゃんの姿と重なってしまう。

「おなじ（だ）」の意味・用法の観察を通じて、「おなじような」「くりかえされる」〈現象〉から〈本質〉を導き出しす一般化のありかたを見ることができた。第2節で確認をしたようにこれは形容詞の中心的な意味である〈特性〉を考えるうえでも重要なポイントである。このような観点からは、本稿は時間的限定性のスケールのなかで〈特性〉〈関係〉〈質〉の相互関係の本質を考えていく第一歩と位置づけることができる。

注

- 1) このような捉え方は Givón (2001) の temporal stability とも共通する。
- 2) 歴史的経緯を『角川古語大辞典』（1982）の記述で確認しておく。
上代では「月見れば於奈自国なり（万葉・4073）のように終止形と同形の「おなじ」と、「月見れば於奈自伎里を（万葉・4076）」のように連体形「おなじき」の両形を用いたが、平安時代以後には前者が圧倒的に優勢となり、それによって後者は文体的にも意味的にも片寄りを持つようになり、次第に独立の連体詞となる方向をたどった。連用形「おなじく」、およびその音便形「おなじう」は、助詞「は」を伴って陳述副詞として用いたり、サ変動詞を伴って用いるほかは用例が少なく、また後には「青山といふ琵琶を亡者の為に手向けつつ、同じく糸竹の声も仏事をなし添へて（謡・頼政）」のように、方向や目的を共通にする二つの事柄をつなぐ接続詞に近い用い方になった。この結果、各活用形が独自の展開を遂げて、形容詞として極めて不完全なものとなった。（第1巻：571）
- 3) 言い方を換えると〈質〉が同じなのではなく、何らかの共通した〈特性〉を持っている、ということになる。〈質〉は〈特性〉の東である。
- 4) ここでは、『日本国語大辞典第2版』の記述を元に提示しておく。
- 5) 『角川古語大辞典』は、このような意味は「連体用法に限られる」と記述している。
- 6) ただし、かざられる名詞が場所や時間などの語彙の意味があり、全体が状況語として機能する場合を同等に扱ってよいかは議論の余地がある。今後の課題としたい。
- 7) このあたりの分析は、言語学研究会の連語論の記述

に基づいている。

- 8) 「同じく」にも同様の例が観察される。
- 9) 近いものとして、次のような例がある。複数の夢を比較しているので規定語のときは性質が異なる。
・「(前略) そういう夢。いつもいつも同じ夢や。隅から隅まで同じや。それでいつも同じようにおそろしく怖い」(アイロン：323)
- 10) この「Bと」の位置づけについて、鈴木重幸(1968)は、「状態があらわれるために必要な対象」として対象語としている。
- 11) 八亀(2012)で扱ったタイプのことを、注10で見た鈴木(1968)は、「Bと」と同様に対象語としている。これについては、議論が必要な部分である。形容詞述語文における文の成分の問題は、今後整理が必要である。稿を改めて考えたい。

【参考文献】

- 奥田靖雄 1983 「に格の名詞と動詞のくみあわせ」言語学研究会編『日本語文法・連語論(資料編)』所収 p. 281-323
- 奥田靖雄 1988 「述語の意味的なタイプ」(琉球大学講義プリント)『教育国語』92むぎ書房 1988 および『奥田靖雄著作集2 言語学編(1)』むぎ書房 2015 に分割して所収
- 奥田靖雄 1996 「『ことばの科学』第7集の発行にあたって」言語学研究会編『ことばの科学7』むぎ書房 p. 1-20
- 工藤真由美 2002 「現象と本質—方言の文法と標準語の文法」『日本語文法』2-2, p. 46-61 日本語文法学会
- 小西友七編 1989 『英語基本形容詞・副詞辞典』研究社
- 鈴木重幸 1968 「日本語文法・形態論1」『教育国語』12, p. 41-60 むぎ書房
- 鈴木重幸 1972 『日本語文法・形態論』むぎ書房
- 高梨信乃 2010 『評価のモダリティー—現代日本語における記述的研究』くろしお出版
- 西尾寅弥 1972 『形容詞の意味用法の記述的研究』秀英出版(国立国語研究所報告44)
- 樋口文彦 1996 「形容詞の分類—状態形容詞と質形容詞」言語学研究会編『ことばの科学7』むぎ書房 p. 39-51
- 樋口文彦 2001 「形容詞の評価的な意味」言語学研究会編『ことばの科学10』むぎ書房 p. 43-66
- 森田良行 1977 『基礎日本語1』角川書店(角川小辞典7)
- 八亀裕美 2008 『日本語形容詞の記述的研究—類型論的視点から』明治書院
- 八亀裕美 2012 「評価を絞り込む表現形式」影山太郎編『属性叙述の世界』くろしお出版 p. 69-89
- 八亀裕美 2014 「現代日本語における『比較』へのアプローチ」『甲南大学紀要文学篇』164. p. 13-22
- 八亀裕美 2015 「〈関係〉を表す形容詞の意味と用法—「近い」と「遠い」」『甲南大学紀要文学篇』165. p. 11-12
- Givón, Talmy 2001 *Syntax I 2nd. ed. An Introduction*. John Benjamins
- 辞典類：『日本国語大辞典第2版』小学館 2003, 『角川古語大辞典』角川書店 1982

【用例出典】

- 容疑者=東野圭吾 2008 『容疑者Xの献身』文春文庫(初出『オール読物』2003.6~2005.1, 単行本 2005 文藝春秋刊)
- 謎=東野圭吾選日本推理作家協会編 2006 『スペシャルブレンド・ミステリー 謎001』講談社文庫(1970からの30年に発表された短編ミステリーの傑作選)
- 魅惑=新井潤美 2016 『魅惑のヴィクトリア朝 アリスとホームズの英国文化』NHK 出版新書
- 薄情=池内紀他編 2015 『日本文学100年の名作第8巻 1984-1993 薄情くじら』新潮文庫
- アイロン=池内紀他編 2015 『日本文学100年の名作第9巻 1994-2003 アイロンのある風景』新潮文庫
- 形態=長沼毅 2011 『形態の生命誌』新潮選書
- 機長=内田幹樹 2004 『機長からアナウンス』新潮文庫(単行本 2001 原書房)
- 小学生=河合隼雄他編 2013 『小学生に授業』朝日文庫